



今
13
98
6

明治廿一年十一月十日
千葉鑑藏
寫真

武陵白猪

東王公證見南不去



西王母證見北不遊

相貓兒法

詩訣

猫兒身短最爲良 眼用金銀尾用長
面似虎威聲要噦 老鼠聞之立便亡

又詩云

露凡能翻瓦 腰長會走家
面長雞種絕 尾大懶如蛇

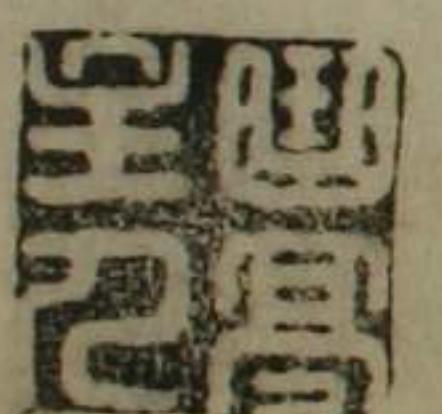
又法口中生 三坎捉一季五坎捉二季七坎捉三
季九坎捉四季花朝口咬頭牲耳薄不畏寒純白

純黑純黃若有貓兒此樣毛色不必揀 看花貓
法身上有法又要四足及尾花俱得過方好

右吳郡俞宗紳猫法重錄干怪鼠全傳後編簡端
文化第肆丁卯年冬十二月上浣

飯台

曲亭蟬火



豪阿闍梨怪鼠傳

後編目錄

第十二套

箱根山爲久喪元

塞河原幽魂諫主

第十三套

正忠孤忠仕幼主

薄戶心烈賣乳計

第十四套

喪金瞽女泣老

瘞玉窮士起行

第十五套

天龍川上忠臣逢節婦

富田旅館重忠賞竹

第十六套

丐兒月下各言志

榛澤嘗中密迎客

第十七套

重忠大歎待義高

光實進鞠問唐糸

第十八套

弄假大姬初認真

失明義高更歸空

前後兩編統計一十八套完

目錄終



機橋梅龜

の三(ナ)れねは
病をもよあの
身をすくねま
紫のぼる
うなせみ 清浦



小月

生

あそそ
まきひあつ
のうねじ
なみけぐら
りもうち
深仲正

宇野小太郎行氏幽龜



余のふるよどこもあらぬ
のうねえひく祐ひされよ
ちふうもとけん 寂蓮法師



堀江藤五

無絶法師



後の世ふ旅陀乃利生
かづひくあみゆき
すは月のねどもや

後永極持政

前編立卷所述るとと爲。頼朝元野岡鷺を木曾の陣中へ遣しふじやう。又仲子を簫倉小封す。晋秦の好を通じ遂に江州に到て鼠の糞倉も清頼豪乃ト改めと禮く願書を進す。猫間光隆木曾も辱しれて憤死。正忠夫妻・玲稚母子を扶護て渡河携邊より退る。光実讐を窺ひて関東に移本。一美仲葉津も討死して爲久金の猫を簫倉又献。大姫・急を告。茂高入間川より脱す。そく父も唐ゑが家も宿かり。行氏・棧橋節より。大太郎主より代す。堀江藤二を欺き唐ゑ石田ふ園す。政子・大姫も詰り。頼豪舊怨を惹く。茂高を助け光実・茂高・猫・鼠を論す。西行・簫倉も文武を談ぶ。金の猫をめぐり。これを村童もあへず。奥州へ赴た。夙九郎・城下太郎・猫を争ひ。光実も殺され。重忠・途小・茂高も詰り。その妻・娘子・唐ゑを生拘り。重忠・途小・ふみをつる。今亦嗣出しきる三冊。前後八巻を以て全本。後文の書と闇合する。がくす。先前編を見なべ。

頼豪阿闍梨・帷鼠傳卷之六

後編上冊

東都 曲亭主人著述

第十一套

箱根山より爲久元を喪ひ

塞河原より幽魂主を諫む

石田太郎爲久も。その夜より唐ゑが頼朝卿を殺す。娘子も生拘ら。も。この隠慝。忽地よ發見。それをあひてありたりに。室中の比収も頗る。門を敲くものあり。門卒もそれを悟ら。誰と向よ。その人答へ。それへむ。爲久も。再生の恩を稟するものあり。その他の主人ももとで坐も。がくど。仔細を述え。ふねが。と。僧も火急の一大事。告あひ。せんと來まう。内ふかく。一二の人に見舞せ。まよ。ううう。ううう。

とひよ。次ぢら。夜。一人きり。石田ヶ老黨塙に藤五。陰
重よ。かくと。すまふ。陰重。眉を單め。かくえり。物の隙。うそ。
配くふ。夜間。うそ。月。と明く。詫く。又。も馴ざる男。あひと。門外。立
在り。うそ。ゆきと。あひと。忙しく。さり。入りて。主君。為久。辯の
爲。体を告よ。が。為久も。そのと。うそ。など。安。うそ。縁由。を。問。夜間
うそ。が。うそ。内。へ。入。うそ。と。うそ。陰重。ゆき。外面。と。到。手を
物見。を。うそ。園。た。件。の。男。小。野。ひ。うそ。と。うそ。來。も。人。ぞ。かく。り。ふ。石田
ど。内。よ。も。うそ。うそ。の。やう。と。あ。うそ。れる。福江。藤五。陰重。うそ。うそ。
が。あ。じ。ひ。と。うそ。と。うそ。彼。人。近。く。す。と。うそ。声。を。低。うそ。あ。うそ。
明白。か。名。告。うそ。今。夜。當。中。よ。椿。うそ。出來。よ。うそ。その。友。を。尋。うそ。唐
糸。往。ふ。爲。え。ね。一。吹。舉。よ。うそ。大。姫。君。よ。給。うそ。させ。へ。原。その。志。

謙食殿。を。一。太。刀。うら。ぐく。亡。君。亡。夫。の。仇。を。報。く。と。うそ。ふ。の。う。と。され。ど。も
その。便。宜。を。ね。ぞ。うそ。が。今。宵。そ。ぞ。ら。く。謙食殿。よ。咫。尺。一。矢。庭。と。發。東
ん。と。うそ。ふ。締。成。うそ。ビ。重。忠。の。内。室。娘。子。夥。の。女。房。よ。うそ。父。集。合。く。遂。不
え。を。搦。うそ。うそ。うそ。重。忠。仰。を。稟。く。唐。糸。を。鞠。向。一味。の。後
を。穿。鑿。うそ。ふ。彼。明。白。よ。うそ。ふ。の。う。ど。も。爲。え。ぬ。ふ。い。疑。ひ。係。已。俄。頃。よ
うそ。の。兵。を。向。うそ。べ。と。く。營。中。張。騒。動。と。り。處。く。と。家。又。在。う。ば。
殃。忽。地。そ。の。矛。ふ。突。ん。が。白。刃。の。首。よ。の。ど。ひ。し。と。腕。を。噬。く。も。その。か。ひ
あ。じ。か。と。ひ。う。と。爲。え。ぬ。ふ。人。ふ。き。う。ビ。庇。飛。の。恩。惠。を。稟。う。れ。り。の
よ。支。き。う。う。と。陰。重。よ。う。れ。す。ま。う。く。大。よ。驚。た。直。よ。主。の。や。う。う。ふ。赤。う
く。彼。男。が。ひ。ひ。つ。一。五。一。十。を。告。よ。く。が。爲。え。ゆ。も。う。ビ。呆。と。惑。ひ。て。せん



主をもとじて。因してりす。唐奈は志をもとむるが、うせら。

復讐の為よくやうるよ。ふとば彼老女。嚮ふ汝が兄。蘇ニ老僕と
入まく。先高を駕一たるものあつべ。もとふ先僧が駕うるへ。真の先
高まゆめ。ざれ秋。とまれくそん。され唐奈を從才女うりとひらう。
宮中へ進せられ。彼又連累まくとも。罪のひとくよ言語。撻
よ道す。悔したまふ。不慮淺く。遣奴よ賣く。そもころを
告ぬる男。ひく人をとど。恩を果す。とりひつても。絶くらしあふらる
タナ。彼も是も。不審たりのとく。身を束ねく死地みほん
ひくせの胡慮うき。まぐ達を縣。うく人脇をさす。時をかちく。
前の恨をまく。賜うん。あれども從者難ねくまくば。道果敢く
さへ。便うたふ。うう。うう。ゆはそくがくば。と密着く。ううのもま
さへ。

ゆごど主従二人馬ようち跨く。後門うき。出鞭を鳴。足騎と跳じ。
貌姑峯政を手て挽まつ。かくとすと。草木既に根由をあく。しる。日す
爲タガ。塙に立只手をくわく。謀く。まく。かく。そ見く。さればこそとく。
彼又告これ。まえうり。只手を下へ。騒動を原。未。佞奸邪智を
爲えが下風。まうりのども。主の先途をえぞりんともせど。まづ
もの。物。とく。貯禄。金銀衣服。まづ。手當。兵卒。分配し。
夜よ紛まく。遼電。まく。散落。まく。よう。さう。役。爲え。主従も。投て
往方を定。など。の顧。馬をまく。貌姑峯。跨よく。入ふ。あく。よ
く。馳。されば。馬を。乗。斃。まく。主従。歩。湖水の畔。まく。まよ。く。
頃。も十五夜の月。山の接。頗。きて。曉。まく。近く。うき。おほ。まく。花女郎元
の。月。戦ぐも。跡。まく。追う。まく。持。まく。主従。うべくもあ。ど。りく。

疲勞されば。地藏堂の前面より。松の株又尻を以て。主從面をあへり。
つ。忙若るれどもあれ。天より雁の音。草葉よ聚く虫の声す。不
オの秋と慰う秋。為え嘆息りゆす。いはるえ昔のそぞらか。近江
湖水の月とくわく。荆仲を射て落し。くように功名をめぐらす。ま
み似ぞ。ひびきゆの貌姑峯より。湖水の畔よ聴き。あくび投げ
ひとがも定り。人の世のとゞざま。かくちくも墓をむや。と家の悪
報きおひもかり。せを鹽。人を怒く。咳く。あせ。陰裏も今こうられ
す。おひえしが。ふくろくとんとおひく。もを疎そり。うなゆ。
殿さん。おどて日本。あら。女く。うなみを笑えぬ。さうも平家の
大敵を追ひ落し。後よ足をうちさせ。その威勢。朝日のそり昇る
よ。傳ひらきて。木曾義仲を裸裸。輒。対するもじめうの代。

うや。唐糸小連係せられ。簾倉殿よ疑きゆくとも。あぢーれを避。
便宣をひく。緯の本末を笑えあげゆ。りくどうるひかへ。ゆかん。
と信づらう。ひ歎せ。為え笑う。えいふゆ。あくとゆへども。これ
俄頃よ駿の路をきく。されば。馬も弊き。自もス飢勞。この山を
躊躇。今かのあれ追まからば。ひく。禦ぐべ。汝謀あく。
うあくせよ。とひふ。陰重も何とあく。アグ跡。又れく物凄ト
く。あぢー然。恐く。あく。あく。塞の河原とく。のぼてくの旅宿も。ころ地
着井へかう。ど青る。うそ。あく。が些の供物。あく。ひかく。おゆく
く。彼の堂内。お想ひ。あく。曉ゆく。も人よあられ。さて。主從が敵
を凌ぐ。便。秀。袖。袖。主從が敵

げよ地獄ふも佛もあらず。まぐ彼所よ憩へべ。とりひうけくかまつ立
ある折しも。雄と久ちじて地蔵堂の内うる。寺山と院視す。前まくま
陰重が呑うとほりぬれ。薄白く項へせき漬る鮮血うもみ。一高
高く叫びゆめゆへど。仰さよふ撲地と仆まく。忽地息を絶てた。為久
られを見よ大不驚也。ひりやと周章し。手を拂ふく。松の根よ脚ん
とすること無を。ゆうじ打撲る洗視。石田を在の手首を。松の幹へ
確けけら。雄手をあげて。引抜んとく手を岡搔く。遂抜くも果て
えうう出を。及々電光石火の如く。左の腕もあげて。侵小傷の根よ縫苗
入り。かくアリ。爲えも落の山よ手をとり。大文字の火の如く。又
断紙巻の梢みが下る。手を却て足を踏み。これと放せ。
されを放せ。と叫ぶのと絶えせんと。ありたり。時よ地蔵堂の扉を。

内ううと押岡を。武士の浪人わたらう壯俊。手ふり皂き草衣の涅のぞ
する。裾絆よ被く。腰よ朱鞚の両刀を十文字よ跨。手よ一蓋の編笠を
押す。徐ちふ歩みゆ。爲えを信とす。やくまくす。観覩の盜臣三す
の手を剣より鋭く。人を殺す。榮利を謀す。天罰ありひも。すん
達を慮ゆふ。の手も。総角のうらう。假ふ唐糸が一子太太郎
と傳。又眞の大太郎。も。義高と號れ。謙倉へ赴た。入向川乃
上をく。汝が家隸姫江謙二とす。んふ駿。唐糸又移氏。桂櫻と毒
殺す。貳う志を示す。遂に掘は謙二を砍く。汝を殺破す。謙倉
お捨ゆふ。我朝を。我朝を。約せらば。それの諸國を徧歷す。
舊好の勇士を。我兵を起さんと。その外。更に仕事ほ。ふるふ



うらわの年。頼豪阿闍梨の夷教諭。三年が間、縦食はまし。密と示され。今茲サヤくふ。その朝の果とれど。近曾縦食を能む。密と唐糸と計をあり。既ようが起さんともおし。途と重糸よ。怪しき。よもよ。ひづり。よ然止せ。夜と縛忍地と齋離し。今宵唐糸が生拘り。よもよ。これ幻術をり。やくれを曉るつ。うて汝も又頼朝と疑。唐糸と共に。罪せんすば。遺恨あり。とをり。甲夜よ汝が門戸を敲き。むく人をとぞ。再生の恩を稟ふる。急を告め。而て放引。うるわ。とよられ。とがうせ。こ縦食よ。又不意朝敵と。うらひあつれ。粟津の松原。ゆく汝よ。驚き。とひゆ。恨れ一言。渴しが。ありしあま。天の彰。うるわ。墨。うるさ。鏡のじ。笑の中。又を隠す。お叔が間者と。うりそ。とびえを陥。よる悪報。

すく。今やろせよ。あくと。湖水をうか湖の汀。よ曙と。死羞の汝。イサク汝よ。逐る。主従が國のうる果。今戈もが。戈兵を起と。軍神の血祭。れこれふすと。犠牲。あくうち。と。罵。迫り。と。刀を肉。と。拔。爲えすと。矛を岡横。勝。まく。天水冠者。戈仲の滅亡。ハ武威。よ傍。一天の君をもすれど。その暴逆。キ家を。殺すれど。さると。爲えをり。仇うと。罵。うり。かく。怨恨。あく。もせよ。うどく名。告。うけ。と。謀。勇士のせざる所。と。ひせも果。と。戈高。と。吟笑。と。大自。の。と。爲えを。そ。う。武道を用ふべ。と。や。一風の縁み。ゆれ。汝も。うぐと。信濃。よ。あく。と。臣附。と。が。又。亦。寵用。と。思。惠日。よ。厚。うぐ。入情。うく。も。達矢。よ。うけて。射て。あく。と。是勇士。

もろ承欽頼朝女を賞美し。ありて用ひざるぞべからず。ふふとされ
を様へといへ汝が清へとぞよきうどや。と責向よ爲えぬ。うじ應せど
頭を低く。泣ぐがど。その時義高慟然とぞよ大よ怒り。又とうち
うく。爲久が眼上ひくとぞう岡へ。しげ友の足を打落しておじ
苦痛をそす。又右の足を削落せば鮮血滾々とあらず。アラ。二正の紅絹
を引ふかう。義高へられ見く。そもそもとうち笑つ。腰の番を又一太刀
をもとびんど切放せば。腸をぐ地より引く。章魚乾くと破家の簷
或ひ時うつね山猿の松よゆる。彷彿とう。がくく義高も爲久が左右
の腕をうち放さよ。龜の地上よ。撻と落。首へうづ。松よのうづ。奇
いと草をえふが。かく三段四段み切る。まくその首をうち
まく。地蔵堂の母どうふ引達本つ。これを機居く。纏をわ掌むと

